



はじめに

中原4号墳からは、多くの生産用具が出土した。その内訳は、刀子4、斧3、^{やりがんな}鉈5、^{のみ}鑿1、鎌3点、鍬鋤先4、砥石2点、鉄鉗1、針14以上、^{かはし}鏝子1であり、10種類38点以上を数える。一般的に生産用具の副葬が衰退する古墳時代後期において、この種類と量は全国的にみても注目しうる充実ぶりといえる。なぜ、直径8mの小円墳にこれだけの生産用具が副葬されたのか、被葬者の性格について考えてみたい。

1. 生産用具副葬の意義をめぐる解釈

古墳出土の農工具については、情報が豊富な前・中期を中心に、副葬する意味についての考究が深められてきた。寺沢知子は、前・中期古墳に副葬された鉄製農工具

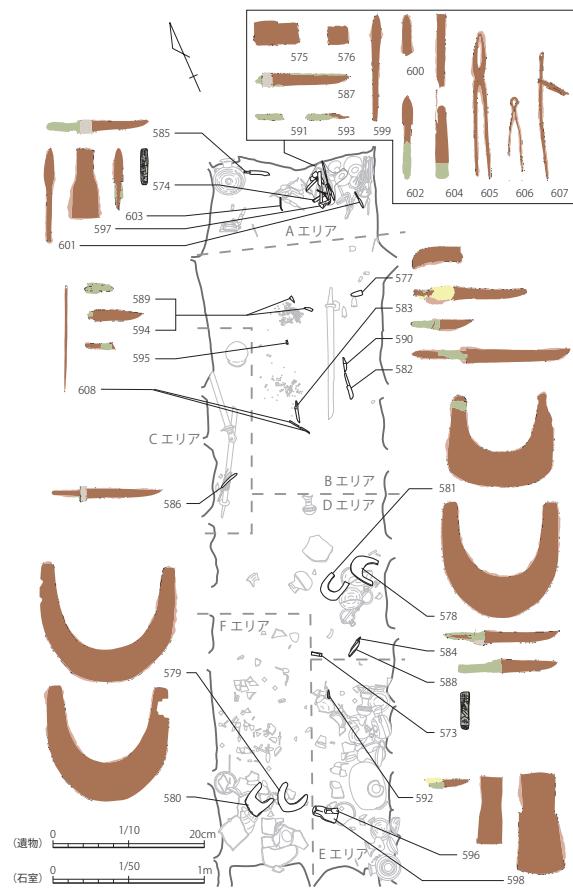


図1 中原4号墳出土の生産用具

の組合せや出土状態を検討し、副葬された農工具を首長が担う農耕儀礼の執行権を示すものと解釈した。白石太一郎も、農工具を象った石製模造品の分析を通じ、副葬農工具は農耕儀礼を実修する司祭者（首長）が用いる神まつりの道具と評価した。広瀬和雄は古墳副葬農工具について田畠を切り開く勧農の象徴物と捉え、共同体を維持繁栄させる首長の役割を示す財の一つとみなした。

こうした前・中期古墳にみられた祭儀の内容は後期になると著しく変容する。白石は奈良県藤ノ木古墳から出土した農工具の分析を通じて、古墳時代後期における農工具副葬の意義を探り、6世紀以降、倭王権中枢の限られた階層が前期以来の農耕儀礼の司祭者としての性格を濃厚に残すいっぽうで、地方を含め多くの首長層は農耕儀礼にあまり拘泥しなくなると捉えた。

こうした問題意識の延長上で、改めて中原4号墳の事例に注目すると、農工具以外にも鉄鉗や針・鏝子といった、その他の生産用具とみられる製品が共伴している点が注目できる。鉄鉗は、鍛冶具の最も基層的な用具として注目されている。その副葬行為についても、鉄器生産を統括・管理する首長の性格や、鉄器生産に直接かかわる渡来系集団の職能を表すものと捉えられている。

古墳に副葬される針についても、生産用具の副葬行為をその用具を用いた手工業生産と関連づける文脈に沿って解釈すれば、その副葬は布・皮革製品の生産と関わる表象行為と捉えることができるだろう。

このように、中原4号墳から出土した生産用具は、農工具副葬の変容過程にある6世紀の実例を具体的に示すだけでなく、鉄器生産や布・革製品の生産ともかかわり、後期古墳における手工業生産用具の副葬行為の意味を総体的に分析すべきことを伝えている。

2. 鍛冶具副葬の意義

中原4号墳からは鉄鉗が1点、出土している。鉄鉗の出土例は東海地方で唯一であり、東日本においても、類例が極めて限られる。以下、鉄鉗と関連する鍛冶具副葬の意義について整理しておきたい。

中原4号墳から出土した鉄鉗は、全長19.3cmの比較的小型の製品である。鉄鉗は大きさの違いに注目することが多い。ここでは、全長20cm未満を小型品、20cm以上40cm未満を中型品、40cm以上を大型品と捉えたい。この基準に照らせば中原4号墳例は小型品に位置づ

けられる。

鉄鉗の大きさは金属加工で用いる工程や技術力の違いを反映したものと解釈できる。大～中型品は鍛冶用具として捉えて問題ないだろう。とくに、全長30cm以上の大型品や中型品の一部は、片手で扱うことができず、複数の工人がかかる作業に使われたものと捉えられる。いっぽう、本例のような小型品は片手で扱える大きさであり、修復や簡易な加工など、より小規模な作業に使用された用具と評価できる。

古墳出土の鍛冶具については、鉄器生産・加工技術の推移を直接的に示す資料として古くから注目されてきた。その中心となる道具が、製品を挟む機能をもつ鉄鉗であり、さらに充実した組合せが見られる場合、かなづち、たがね、かなどこ、やすり、鐵鎚、鐵砧、鐵鑊などが共伴する。

中原4号墳出土の鍛冶具組成を評価するために、鉄製鍛冶具の組合せを以下のように分類する。

A類) 4種の鉄製鍛冶具（鉄鉗、鉄鎚、鑊、鉄砧の組合せ）が揃う事例

B類) 2～3種の鉄製鍛冶具が共伴する事例

C類) 1種類の鉄製鍛冶具が出土する事例

このうち、C類は、鉄鉗のみが確認できる類型が主体といえ、中原4号墳を含め、東日本地域の鍛冶具出土例はこの類型に限定できる。1点の鉄鉗を副葬することは、鍛冶具副葬の最も基層的な行為であると認識しうる。

日本列島において鉄鉗を中心とする鍛冶具が出土はじめるのは、古墳時代中期前葉のことである。古墳時代



図2 鉄製鍛冶具の分布

中期の鍛冶具出土古墳は北部九州をはじめ、岡山県域、奈良県域などに集中する傾向があり、鉄器生産の中心地をあとづけることができる。

近年、朝鮮半島南部における鍛冶具の出土例が激増している。朝鮮半島における鍛冶具の組合せを先の分類に従って整理すると、日本列島の事例と比べて種類が充実しているA類やB類の割合が高い。鍛冶具の副葬行為は日朝に共通し、その量や種類の違いが鉄器生産力の差を反映しているものと解釈できるだろう。朝鮮半島南部における鍛冶具副葬は、古墳時代前期に併行する時期にもみられるが、中期から後期にかけて出土例が集中する点は、日本列島と共通する。鉄鉗をはじめ、鍛冶具個別の大きさが多様であることも留意したい。中原4号墳例のような小型品も朝鮮半島から一定量が認められるので、鉄鉗の大きさの違いは鍛冶の場面や従事者数の違いなどを反映した機能差に起因する可能性が高いとみられよう。

朝鮮半島南部地域における鍛冶具出土古墳は、洛東江以東の地域に偏りがある点も留意したい。日本では鉄器



図3 鉄鉗の使用状況 左：大型品 右：小型品

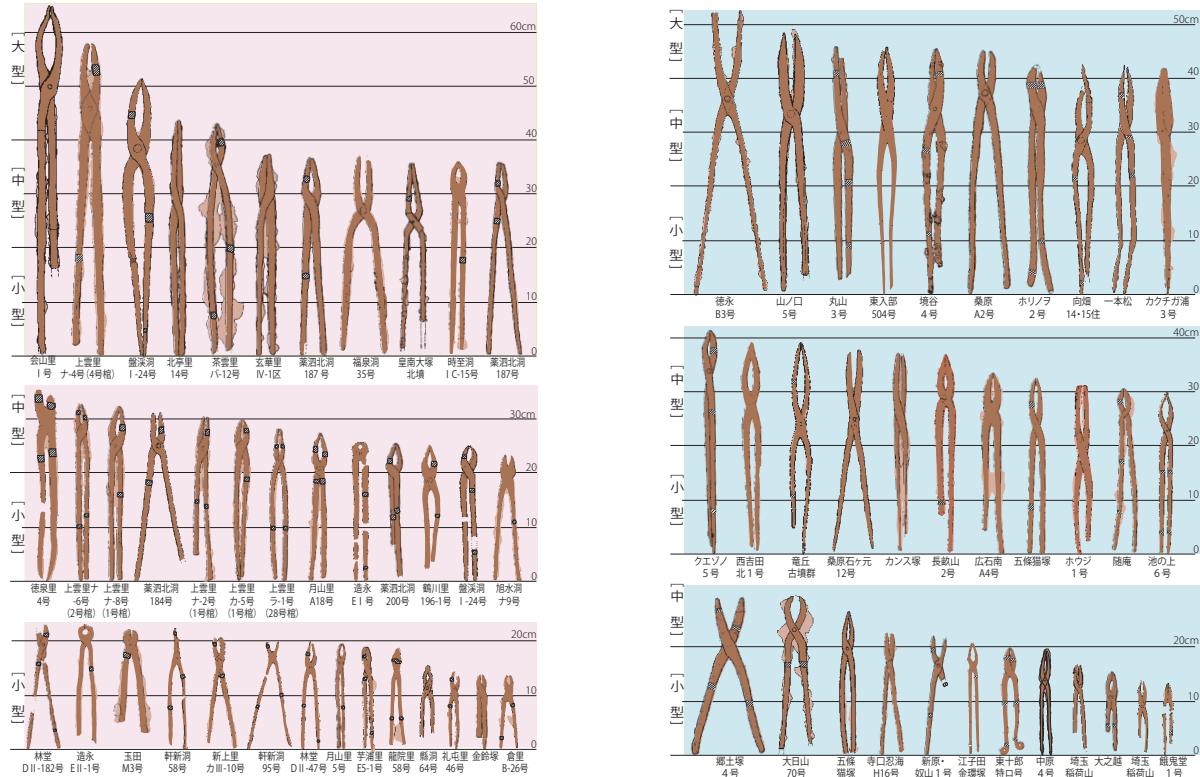


図4 日朝の鉄鉗 左：朝鮮半島出土品、右：日本列島出土品

生産の中心地として加耶地域が注目されているが、朝鮮半島南部全体で比較すれば、鍛冶具出土古墳の分布の中心は、新羅の領域にあるとみなせる。日本列島の鍛冶技術の淵源地として、新羅の領域を視野に入れた検討が求められるだろう。

鍛冶具副葬古墳の様相を古墳の時期、出土地、出土した鍛冶具の種類などから整理すると、鉄器生産技術の伝播過程とその定着度がうかがえる。朝鮮半島における分布の核は新羅の領域を中心とした洛東江東岸域にあり、古墳時代中期前葉から中葉にかけて北部九州や岡山県域、奈良県域といった西日本地域に伝播する。東日本への移入は古墳時代中期後葉以降であり、西日本地域と比べて遅れる傾向がある。また、東日本では副葬される鍛冶具が小型品の鉄鉗に限定され、鉄器製作工程の複雑化という視点においても西日本地域との違いがある。6世紀以降も、東日本地域では小型の鉄鉗のみを副葬することが存続することを考慮すると、鉄器製作にかかる東西差は少なくとも6世紀までは顕著であったと解釈できよう。このように、副葬鍛冶具の充実度の違いは、日本列島内における鉄器生産能力の違いを示すものと捉えられる。

鍛冶具の副葬には、鉄器生産の統括者としての首長の性格や直接的な鉄器生産者としての職能が示されると解釈される。小規模な古墳である中原4号墳の事例は、両者の性格を併せ持つものといえる。当墳では鍛冶具以外の生産用具も豊富に出土していることを重視すると、中原4号墳における鉄鉗の副葬行為は、地域における手工業生産を総括する中で鉄器生産にかかる技術集団も統率する役割を担った被葬者の職能を表象するものと捉えておきたい。

3. 後期古墳における生産用具副葬の意義

さいごに中原4号墳で出土した豊富な生産用具の副葬の意義について触れておきたい。鉄製農工具の副葬・埋納事例として、種類や量が最も充実しているのが、古墳時代中期前半代である。この時期を頂点に後期に至ると生産具の副葬事例は急速に少なくなる。6世紀における生産用具の副葬状況は地域ごとの相違が顕著である。縮小傾向はあるものの、西日本地域では生産用具の副葬行為は残存する。なかでも、北部九州や愛媛県域、奈良県域などに農工具を多く副葬する古墳が目立ち、その他の地域との差異が顕著である。

筑紫を中心とした北部九州においては、農工具を3種類以上副葬する後期古墳が首長墓および中小規模の古墳とともに一定量認められる。また、鉄鉗を中心とする鍛冶具を副葬する後期の中小古墳が多いことも特徴的である。さらに、愛媛県域や奈良県の葛城地域においては比較的小規模な古墳を中心に農工具が豊富に副葬されている。これらの地域は、古墳時代中期から後期にかけて、渡来系集団が集中的に移動した地域と評価でき、生産用具を出土する小円墳には、渡来系技術者集団をその被葬者に想定できるものが多い。

在來の古墳祭祀の中に生産用具を豊富に副葬する伝統がみられないことをふまえると、中原4号墳における生産用具の副葬行為に、被葬者の出自や職掌などを積極的に読み取ることが許されよう。古墳に副葬される生産用具については、地鎮用具や建築用具などと限定するのではなく、広く農耕・手工業生産にかかわる儀礼用具と捉えておく方が妥当と考えられる。

鉄鉗の副葬には、鉄器生産や加工技術に長けた技術者集団との密接な関係を想定することができる。東駿河の地において鉄器の生産や加工に従事した集団の中には渡来人が含まれていた可能性も充分想定できるだろう。また、特異ともいえる豊富な生産用具の副葬行為からは、中原4号墳の被葬者が、北部九州や、愛媛県域（今治・松山地域）、奈良県域（葛城地域）といった生産用具を豊富に副葬する地域と何らかの関係をもっていた可能性も指摘しうる。

これらの地域には、渡来系の埋葬施設である竪穴式横口式石室や、段構造をもつ無袖石室が多くみられることも注目できる。中原4号墳に築かれた横穴式石室の系譜を考究する上でも、石室形態が共通するこれら遠隔地との関係を想定する視点が求められるだろう。

まとめ

中原4号墳から出土した豊富な生産用具の特徴を整理する作業を通じ、後期古墳における生産用具を用いた祭祀の変容過程に触れた。とくに、手工業生産や加工技術に長けた中小勢力には生産用具の副葬が残存し、遠隔地どうしで集団間の関係が想定しうることは重要である。中原4号墳から出土した須恵器は数や種類が多く、生産地も複数にまたがるとみられる。豊富な副葬須恵器の様相から判断すると、中原4号墳の被葬者は須恵器の生産



図5 後期古墳出土の生産用具

主体とも密接な関係を有していたと解釈しうる。外来系器種である把手付碗の保有は、この古墳の被葬者が渡来系集団と関係をもっていた可能性も指摘できる。

中原4号墳から出土した武器や馬具は、日本列島の各地で共通する特徴がうかがえることから、その入手の経緯には、倭王権の関与があったことがうかがえる。100点を超える鉄鎌の出土量は周辺の古墳と比較しても群を抜いており、本墳の被葬者が極めて武的な性格を強く帯びていたことが理解できよう。また、本墳から出土した武器や馬具は必ずしも最高位の首長の持ち物とはいえないことも重要である。武器や馬具に明確な階層性が看取できることを考慮すると、その流通、保有の背後には倭王権の統制力が働いていたとみることが妥当であろう。

中原4号墳から出土した玉類には、愛知県西部（尾張）以西の西日本にみられる諸特徴が看取できることも注目できる。この検討結果は、中原4号墳の被葬者が西日本地域と強い繋がりをもっていたことを伝えるものである。石室や生産用具副葬の評価とも整合的な西日本地域との関係は、手工業技術の東方移転のあり様を考える上でも示唆的である。

中原4号墳の被葬者には、倭王権との軍事的な結びつきを前提に、近畿地方や西日本地域の渡来系集団と関係をもち、駿河の地に新たな産業をもたらした技術者集団の統括者としての性格を読み取ることができる、と結論づけることができるだろう。

※参考文献等は『伝法 中原古墳群』筆者考察を参照。